

珍猫百覧会

(仮名垣魯文の書画会)

明治十一年(一八七八)七月二十一日 於 両国中村楼

久保田彦作の記事

「本日(七月廿一日)会場中村楼の門口には、紙招牌へ珍猫百覧会云々と筆太に記載して縦覧の目標とし、右の方芝山に在来する樹木をかたどり、彼の猫塚の石猫を据付けたるは、後日浅草公園花屋敷植六の庭中に建つると(编者曰、この猫塚は今谷中天王寺墓地に在り)本日の開筵を併せたる目途にして、正面の玄関先の額面は、新小判を以て造りたる珍猫百覧会の五文字、額縁は緋鹿の子の首玉に真鍮の鈴を裝飾す、打違への旗は白地へ赤色にて会主が猫面の遊印を染出し、数十の紅燈を掲げ、楼上には会主縦覧の賓客を迎へ、広間の上座は清楽合奏者の一席とす、此前に卓を置き大花瓶には秋草を挿み香炉の香は馥郁として座中に薫ず、百覧会陳列場の一区は南の廊下を隔てたる座敷教室にして、入口より数間の間左右に配列す、猫塚の碑銘は仮に表装して同広間の床に掲げ、会場縦覧の前後は此碑銘を第一部分とし、順次に東の方壁を隔てたる一席を第二部分とし、爰には本日開筵の為に当日有名の諸文人より寄贈せられたる書画の幅を掲ぐ、是より第三部分の入口に沿ひ右の方を書画幅とし左の方を器物の陳列場とし、第四第五と分ち而して出口の帰路に就かしむ。列品殆ど六百余种、出口の上に花簪の扁額を掲げ之を縦覧の婦女子に呈して余興とす、御前八時三十分場中の陳列全く整ひ同九時より開場し午後八時閉場と定む。本会の周旋補助は新聞各社を始め萩原乙彦、大蘇芳年、立斎広重、武田谷斎、松林伯円、三遊亭円朝、武蔵屋猫七の諸氏にして、清楽合奏者は鶴原堂鳥屋氏の周旋にて、音律整々たる合奏に衆客の心耳に澄まさしむ。詩文人の揮毫するや衆客拏つて唐紙扇面に其の筆跡を乞ふ、又清楽の洋々たる間彼の開化講談松林伯円、席の中央に進み恭しく祝詞を朗読す、之につゞいて演説家の隊長堀竜太先生進んで猫々論を演説せり、喝采の声は拍手と共に満場に響き渡れり、会主の旧知己たる梅素玄魚、河竹其水、瀬川如皐の三翁は、共に会主の後見となりて此会の隆盛を補はれ、六二連には砂筵、高筵、染谷笠仙の諸氏、勝川春亭、五姓田芳松、写真家は二見朝隈、北庭筑波、埴芳野、浜町の和田氏等二十八名、且新聞投書家には為永春江、若菜貞爾、野崎左文、八木梅桂、結城光昭、風也坊、花迺舎由縁、松崎徳造、花川戸岩床、膝小僧、鍬の屋一農、賞楠堂、鶴甫、伊藤文二郎、西村賢八郎、中坂まとき、道墮賤生、芙蓉堂の諸先生にして孰れも祝文の玉章を増られたり。新富座の俳優連には尾上菊五郎、市川小団次、其他門弟二三名を引連れ、当日打出し後より縦覧に来られたり。此日最も遺憾なりしは午後九時頃、大伝馬船に数人の楽人孰れも烏帽子素袍にて、舳に猫塚供養と記したる紅燈を掲げ、棧橋に漕寄るすとき、三絃鼓の調を正して、供養塚といふ新曲を奏す、此催し主は新富座狂言作者竹柴進三にして、彼の楽人は同座の離子方の連中なりしが、時已に閉場後にして会員の外聞く者無かりしは惜むべし」

『私の見た明治文壇』「明治初期の新聞小説」1p46所収

(野崎左文著・底本2007年(平凡社・東洋文庫本))